

有馬記念

夢のグランプリ研究読本

小川隆行
ウマフリ



写真／水面

美しき名勝負、
狂おしき波乱。

70年の名勝負×中山芝2500mを徹底研究。
なぜ有馬は、これほど劇的なのか。

有馬記念

夢のグランプリ研究読本

小川隆行＋ウマフリ

星海社

400



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

西日を浴びた向正面奥のスタート地点が映る。

有馬記念の発走を待つ、その光景を見るたびに思う。今年もここまで来たのだと。低く傾いた冬の日差しがコースを照らし、冷たい風が頬を刺す。中山競馬場に暮れゆく1年を惜しむような空気が流れている。まだ終わってほしくない。けれど、早く結末を知りたい。そんなふうに心が二つに割れるレースを、私はほかに知らない。

年の瀬とは不思議な季節である。去りゆく年を振り返りながら、人々は新しい年を迎える準備を始める。普段は意識しない時間の流れが、ふと見えてくる。入学した年。社会へ出た年。誰かと出会った年。別れた年。人生の節目がその年の景色とともに記憶へ刻まれていく。

人生は本来、途切れることなく続いている。昨日と今日のあいだに、目に見える境目があるわけではない。それでも私たちは区切りを求める。卒業、結婚、旅立ち、永遠の別れ。人は人生の節目に儀式をつくる。終わりを受け入れ、次へ進むために。有馬記念もまた、そんな儀式の一つなのかもしれない。

ファンに選ばれた馬たちが、1年の終わりに一堂に会する。そこには、ほかのどのレースとも少し違う熱がある。夢を託す人がいる。奇跡を願う人がいる。感謝を伝えたい人がいる。別れを惜しむ人がいる。有馬記念は、そうした無数の祈りを、ひとつのターフに受け止める。凍える寒さのなか、ファンファーレが鳴る。歓声が上がる。それぞれの1年を胸に抱え、人々はグランプリを見つめている。

有馬記念は時として順当に決着する。時として大波乱を生む。そして、ときどき奇跡が起こる。もう届かないと思った差が詰まり、失われたはずの時間がふいに巻き戻される。人生に願ったことがそのまま叶う瞬間は少ない。だからこそ、もう駄目だと思った先で起こる奇跡に、人は心を揺さぶられる。

一緒にレースを見た人たちの顔を思い出す。家族。友人。恋人。もう会えなくなった人。遠く離れてしまった人。それでも有馬記念が近づくたびに、その面影は静かに胸へ帰ってくる。

競馬の世界も、人の生も、少しずつ姿を変えていく。祖父はテンポイントを語る。父はオグリキャップを語る。私はディーピンパクトを語る。子どもたちはこれからどの馬を語るだろう。好きな馬は違う。忘れられないレースも違う。けれど私たちは皆、有馬記念を語っている。そうして有馬記念は、競馬の歴史であると同時に、その時代を生きた人々の時間の

アルバムになっていく。

レースはわずか2分半ほどで終わる。けれど、その2分半には1年が凝縮されている。春に芽吹いた夢も、夏に流した汗も、秋に擲んだ光も、そのすべてを抱えて馬たちは舞台へ向かう。この日集った馬たちの何頭かは、きつと競馬場に戻ってこない。もう二度とその全力疾走を見ることはない。拍手に包まれながら、ひとつの物語が静かに幕を閉じる。寂しいけれど、それでいいのだと思う。終わりがあるから、次がある。翌朝になれば、新しい一日が始まる。去りゆくものを見送り、新しい夢が走る。

あと何回、この景色を見ることができだろう。西日に染まるターフを。胸を高鳴らせるファンファーレを。暮れゆく年の空気を。その答えは誰にもわからない。だからこそ、この時間は愛おしい。

有馬記念とは、1年の終わりに人々が集い、別れを惜しみ、願いを託し、次の1年へ歩き出していくための場所なのだと思う。

ページをめくりながら、ぜひ思い出してほしい。

あなたが生まれた年の有馬記念を。

あなたが心を震わせた有馬記念を。

そして、そのレースとともに歩んできた人生の時間を。

(志馬悠)

目次

はじめに

第1章

伝説の目撃——時代をつくった世紀の10番勝負

11

- 1979年 グリーングラス 執念の戴冠、TTG最後に咲いた花 12
- 1980年 ホウヨウボーイ 冷たい風の中で見届けた、両雄の攻防 18
- 1988年・1990年 オグリキャップ 歴史的名馬に、最後の夢を託した日 24
- 1991年 ダイユウサク 破天荒な調教師が育てた、異色のグランプリホース 30
- 1997年 シルクジャステイス 遅れてきた大物と、若き騎手の有馬記念 36
- 2000年 テイエムオペラオー 霸王の物語、その終わりに 42
- 2007年 マツリダゴッホ 語り継ぐべき中山巧者。駆ける衝動に生きた馬 48
- 2013年 オルフエーヴル 反骨の怪物が見せた、最後の100m 54
- 2018年 ブラストワンピース 頭の高い馬を探して、有馬を読む 60
- 2023年 ドウデュース 「楽しみな馬」が見せた、特別なグランプリ 66

第2章

激闘クロニクル——第1回から現在まで、全70回の完全軌跡 77

2025年—2020年 78

ミュージアムマイル 78 レガレイラ 80 ドウデュース 82

イクイノックス 84 エフフォーリア 86 クロノジェネシス 88

2010年代 90

リズグラシュー 90 ブラストワンピース 92 キタサンブラック 94

サトノダイヤモンド 96 ゴールドアクター 98 ジェンティルドンナ

オルフェーヴル 102 ゴールドシップ 104 ヴィクトワールピサ 106

100

2000年代 108

ドリームジャーニー 108 ダイワスカーレット 110 マツリダゴッホ 112

デーブインパクト 114 ハーツクライ 116 ゼンノロブロイ 118

シンボリックリスエス 120 マンハッタンカフェ 122 テイエムオペラオー 124

1990年代 126

グラスワンダー 126 シルクジャスティス 128 サクラローレル 130

マヤノトップガン 132 ナリタブライアン 134 トウカイテイオー 136

メジロパーマー 138 ダイユウサク 140 オグリキャップ 142

1980年代 144

イナリワン 144 メジロデュレン 145 ダイナガリバー 146 シンボリドルフ 147

リードホーユー 148 ヒカリデュール 149 アンバーシャダイ 150 ホウヨウボーイ 151

1970年代 152

グリーングラス 152 カネミノブ 153 テンポイント 154 トウショウボーイ 155

イシノアラシ 156 タニノチカラ 157 ストロングエイト 158 イシノヒカル 159

トウメイ 160 スピードシンボリ 161

1960年代 162

リュウズキ 162 カブトシロー 163 コレヒデ 164 シンザン 165 ヤマトキヨウダイ 166

リュウフオーレル 167 オンスロート 168 ホマレボシ 169 スターロツチ 170

1950年代 171

ガーネット 171 オンワードゼア 172 ハクチカラ 173 メイチヒカリ 174

コラム 勝てなかった主役たち 175

特別インタビュー

シンボリクリスエスからゼンノロブロイへ／藤沢和雄元調教師が語る「有馬記念3連覇」の真実 176

第3章 有馬記念の考察——「中山芝2500m」を完全攻略する 191

有馬記念の血統学 1 時代を彩る「有馬の血」 栗山求 192

有馬記念の血統学 2 有馬を制する「パワーの血」 水上学 196

馬 体 名馬の馬体から紐解く「有馬記念の法則」 治郎丸敬之 202

第4章

有馬記念「データルーム」 219

パドックと返し馬 厳寒期の中山と過酷な転戦に打ち勝つ「状態面」とは？ 京増真臣 206

枠 順 コーナー6回を攻略する内枠の立ち回りと歴史を読み解く 小田哲也 210

中山実績 直線310mを制する「脚質と展開」と4角の位置取りがVライン 小田哲也 212

世相馬券 1年の出来事と奇跡のサインが導く 小川隆行 214

臨戦とコース GI馬の疲労を凌駕する勢いと中山巧者が波乱を呼び込む 久保木正則 216

タイム 極限の時計が刻まれる「中山芝2500m」の真実 220

前走着順 データが明かす意外な傾向。「前走1着」より強い惜敗組の理由 224

出走回数・ローテーション グランプリの常連たちと、それぞれの「有馬記念への道」 228

着差と接戦 圧倒的な独走か、数cmの死闘か。有馬記念を彩る「着差」の記憶 232

おわりに 有馬記念を見つめて 236

第1章

伝説の目撃

——時代をつくった世紀の10番勝負

1979年 第24回

グリーングラス

執念の戴冠、TTG最後に咲いた花

都はるみの『北の宿から』がヒットした1976（昭和51）年、天才福永洋一を鞍上にむかえ、神戸新聞杯と京都新聞杯を連勝中のトウショウボーイが、1番人気で菊花賞のパドックを歩いた。2番人気がダービー馬クライムカイザー。迎え撃つ関西馬の大将は、新馬戦から5連勝して皐月賞2着の3番人気テンポイントだった。

しかし勝ったのは21頭立て12番人気のグリーングラス。安田富男が内ラチ沿いをひたすら走らせ、「グリーングラス、イン、ステージ」と私は呟いた。テンポイント2着、トウショウボーイ3着。マスコミはTTG時代と名付けた。

この年の有馬記念で武邦彦のトウショウボーイが勝ち、鹿戸明騎乗のテンポイントが2着。グリーングラスの出番はなかった。

石川さゆりの『津軽海峡冬景色』がヒットした翌77年の有馬記念を勝ったのはテンポイント。トウショウボーイ2着、グリーングラス3着。TTG時代の花火大会だった。

78年1月、海外遠征を前にしたテンポイントが日本経済新春杯（現日経新春杯）のレース中に骨折。2カ月の闘病生活後に死亡した。

父 インターメゾ
母 ダーリングヒメ
母の父 ニンバス

戦績 [8-7-4-7]
有馬記念 天皇賞(春) 菊花賞
距離適性 長距離
脚質 先行・差し

トウショウボーイは引退して種牡馬に。山口百恵の『プレイバックPart 2』がヒットした同年の有馬記念を勝ったのは加賀武見のカネミノブ。岡部幸雄のグリーングラスは6着だった。

ジュディ・オングの『魅せられて』がヒットした79年、6歳になったグリーングラスは、有馬記念が引退レースになった。前年のダービー馬サクラショウリに1番人気を譲ったが、ラストランを惜しむファンはグリーングラスを2番人気にした。

同馬の鞍上は大崎昭一。グリーングラスに一度大崎を乗せたい、という中野隆良調教師の願いがなかった。

中野師は安田騎乗で内ラチ沿いをひたすら走った菊花賞のグリーングラスが脳裏に残り、その再現を大崎でという思いが強かった。

小細工は無用、先行して粘るだけと中野師は大崎に指示。同馬に初騎乗となる大崎にも異論はなかった。

坂を上ってから横山富雄のメジロファントムが猛然と追い上げ、グリーングラスと鼻ヅラを合わせてゴール。電光掲示板に「写」が点滅した。

大崎は1着を確信していたが、負けも意識した中野師は、ハナ差勝ちを知って眩暈がしたという。

私は雑誌『優駿』から観戦記を依頼されており、タイトルを「グリーングラス・イン・ステージ」とした。私が美浦トレセン内にある厩舎にくっついていいる中野師の家で酒を飲んだのは、その有馬記念から数日過ぎた夜だった。

「有馬記念が近づいてきたころ、ずいぶん無口になっていたよねえ」

と私が言った。競馬記者とのやりとりで、中野師が逃げるようにしていたのをわたしは見ているからだ。

「勝ちたい。ラストランの有馬記念でグラスに勝ってほしい。その想いが強くなって、勝ちたいという言葉しかなくなっちゃった。勝ちたいと言っても意味ないしね。」

トウショウボーイとテンポイントが勝った有馬。TTG時代とか言われて、Gだけが有馬を勝っていない。おれとしては結構プレッシャーだったよ。

誰もいないところで、おれ、グラスに頭を下げたよ」

「グリーングラス、何か言った？」

「聞こえなかったけど、何か言ったみたいと思ったね。アハハ」

「アハハ。たぶん、何か言ったね」

そういう会話が私は好きで、たぶん中野師も好きだったのだろう。二人は気が合った。

その数日後、私はグリーングラスを生産した諏訪牧場のある青森県上北郡七戸町天間館へ

出かけた。

昔は岩手の小岩井牧場からダービー馬が続出。青森産もマツミドリ、ゴールドデンウエーブ、オートキツ、ヒカルメイジ、ダイゴホマレ、コマツヒカリ、フェアウインとダービー馬を出したが、最近ではグリーングラスが久しぶりとなる青森産馬の傑作となった。

「グリーングラスのことを思うたびに、グリーングラスが走るのを見るたびに、昔のね、岩手だ、秋田だ、青森だって、競馬の世界を引っ張ってた東北を思い出している。

今はすっかり、競走馬の生産は北海道のものになっちゃったなあ。

青森の生産者は90%がサラブレッド専業じゃないんだよね。ま、私なんかは、まだ夢を捨てないで、懸命に働いているんだけど。

そんな現実の流れのなかで、グリーングラスが必死に働いてくれたなあ」と

と諏訪牧場を営む間悌三は手を合わせて頭を下げた。

この原稿を書いているのは2026年。グリーングラスが有馬記念を勝ってから何年が経ったのだろう。

昔の話はいらないよと言われそうだが、昔の競馬を書いていると元気になるのが不思議である。

(吉川良)



年下のライバルたちを退けて有終の美を飾った。TTG時代の美しい幕引き。

「偉大な二頭が去った ターフで最後に輝いた」 ——時代を完結させたラストラン

一時代を築いた同世代のトウショウボーイが引退し、テンポイントが亡くなった後も、6歳いっぱいまで走り続けたグリーングラス。前年の天皇賞（春）から1年半以上、勝利から遠ざかっていたが、中野隆良調教師はラストランの手綱を大崎昭一騎手に託した。好位から早めのスパートで粘り込み、ライバルたちの猛追を抑えて有終の美を飾った。その勝利はTTG時代の掉尾を飾るに相応しいものだった。

1979年12月16日

第24回 有馬記念

中山 芝右 2500m 3歳以上オープン 晴 良

レース結果

着	枠	馬番	馬名	性	馬 齢	騎 手	タイム	着 差	調教師	人 気
1	2	3	グリーングラス	牡	6	大崎昭一	2:35.4		中野隆良	2
2	6	12	メジロファントム	牡	4	横山富雄	2:35.4	ハナ	大久保洋吉	6
3	4	7	カネミノブ	牡	5	加賀武見	2:35.9	3	阿部新生	7
4	3	6	ハシクランツ	牡	3	柴田光陽	2:36.1	1.1/4	内藤繁春	8
5	2	4	ホクトボーイ	牡	6	久保敏文	2:36.4	1.3/4	久保道雄	15
6	3	5	サクラショウリ	牡	4	小島太	2:36.4	アタマ	久保田彦之	1
7	7	13	テンメイ	牡	5	清水英次	2:36.7	2	坂田正行	9
8	1	2	カネミカサ	牡	5	蛭沢誠治	2:36.9	1.1/2	成宮明光	11
9	6	11	インターグローリア	牝	5	樋口弘	2:37.1	1.1/2	柳田次男	4
10	8	15	リンドブルバン	牡	3	嶋田功	2:37.1	アタマ	見上恒芳	10
11	5	10	バンブトンコート	牡	4	伊藤清章	2:37.3	1	伊藤修司	14
12	4	8	ハツシバオー	牡	4	岡部幸雄	2:37.3	ハナ	高橋英夫	13
13	5	9	インターグシケン	牡	4	柴田政人	2:37.6	1.3/4	久保田金造	5
14	7	14	カシュウチカラ	牡	6	郷原洋行	2:37.6	クビ	矢倉玉男	12
15	1	1	ボールドエーカン	牡	3	村本善之	2:38.2	3.1/2	内藤繁春	16
中 止	8	16	ピンゴガルー	牡	3	中野榮治			久保田彦之	3

ホウヨウボーイ

冷たい風の中で見届けた、両雄の攻防

上京して2年目の冬、はじめて中山競馬場で観た有馬記念である。グリーングラスが勝った前年は浪人中で、後樂園の“黄色いビル”で馬券を買ってテレビで観ていたが、この年は大学の競馬仲間と一緒に中山に行っている。当時の競馬場は“悪いおとなの社交場”といった雰囲気で、そのなかでわたしたちは精一杯背伸びして悪ぶろうとしていた。古い中山のスタンドは現在と違って動きやすく、見やすくもあったが、吹き抜ける風がひどく冷たく、カップ酒で暖をとっていた。

1980年の有馬記念は混戦模様だった。重馬場だった秋の天皇賞では、大逃げを敢行した8番人気のプリティキャストが2着のメジロファントムに7馬身の差をつけて逃げきり、1、2番人気のカツラノハイセイコとホウヨウボーイは為す術なく6、7着に負けている。そういうわけで、有馬記念で1番人気に押し上げられたのはメジロファントムだった。前年の有馬記念でもグリーングラスをハナ差まで追い詰めていた。2番人気は2年前の有馬記念優勝馬で、前年も3着のカネミノブ。ともに堅実な走りが評価されている。

それでもやっぱり、この年の有馬記念の注目馬は、大きな病気や怪我から復活した関西と

父 ファーストファミリー
母 ホウヨウクイン
母の父 レアリーリーガル

戦績 [11-5-0-3]
有馬記念 天皇賞(秋)
距離適性 長距離
脚質 自在・先行

関東のスターホース、カツラノハイセイコとホウヨウボーイである。天皇賞では、2番手と3番手で牽制し合うようなかたちになり、動くに動けないままプリーティキャストを逃がしてしまったことも敗因のひとつになった。

カツラノハイセイコはハイセイコーの初年度産駒で79年のダービー馬である。わたしがはじめて東京競馬場で観たダービーだ。父が3着に負けたダービー馬の称号を手にし、そこからスター街道を歩んでいくはずだったが、体調を崩した京都新聞杯は10着、さらに肺炎も患って菊花賞を断念している。再起不能を危惧されるほどの重症だったが、1年後の秋に復帰すると、復帰3戦目の目黒記念に勝ち、ダービー以来の大舞台が天皇賞だった。ダービーではシンザンの有馬記念で知られる松本善登騎手が乗っていたが、復帰後は25歳の河内洋騎手に替わった。この年は72勝をあげて初のリーディングジョッキーとなる、関西のホープである。

一方、5歳のホウヨウボーイは2歳12月の新馬戦を6馬身差で勝ったが、右前脚を骨折、さらに3歳の夏に左前脚を骨折し、結局、復帰できたのは新馬戦から1年9カ月後の4歳の夏だった。それから1年余、前走の天皇賞まで11戦して7勝、2着3回と、ゆつくりとキャリアを積みあげながら、春の日経賞（中山）ではカネミノブやヨシノスキー（中山で重賞3勝）らを相手に楽勝していた。天皇賞の敗戦ひとつで見限れない“超上がり馬”である。騎手は

デビュー戦から乗っている加藤和宏。日経賞が重賞初勝利だった24歳だ。

こう書きながら、自分は何枠から買っていたのかな、と成績表を眺めていて、リンドタイヨールとタケノハッピーの7枠だったのを思いだした。テスコボーイ産駒のリンドタイヨールは東京4歳S（現共同通信杯）を圧勝してダービーの最有力候補と評されながら、クラシックの前に故障してしまった。トウシヨウボーイ・ファンのわたしは「テスコボーイ信者」でもある。故障から復帰後のリンドタイヨールは精彩を欠いていて、ダービーの11番人気。穴党には「狙いごろ」だ。騎手はストロングエイト（73年有馬記念勝利）で日本中を驚かせた中島啓之なのも心強い。

タケノハッピーはエリザベス女王杯2着で5番人気。この年の3歳牝馬は桜花賞馬ハギノトップレディを筆頭にレベルが高く、女王杯6着のスイートネイティブはオープンでホウヨウボーイを破っている。『競馬エイト』の大橋巨泉はタケノハッピーを本命にしていた。

レースは快速馬サクラシンゲキの逃げではじまった。プリティキャストも前にでようとするがスピードが違う。ホウヨウボーイは素早く3番手をキープし、カツラノハイセイコは後方からレースを進めている。そのまま1周目のスタンド前を通過していく。タケノハッピーもうまく先行して、いい感じで走っているようだ。わたしたちはラジオを聴きながら馬群を肉眼で追っていた。中山にターフビジョンが設置されるのは5年後のことだ。

3コーナー過ぎから動きがあり、白いマスクのカツラノハイセイコが外から上がってきた。そのままサクラシングキに並びかける。4コーナーでは馬群がひとかたまりとなり、大きく遅れて1頭、テンポイントとおなじ勝負服のプリティキャストがいる。天皇賞とはまったく逆で、一度も先頭に立てないまま大差のしんがりにならなくなった。

直線の攻防はわたしたちの席からもよく見えた。先頭に立ったカツラノハイセイコが突然外にふらつくと、ぼつかりと空いたインコースをホウヨウボーイが抜けてくる。カツラノハイセイコは態勢を立て直すと、外から追い込んできたカネミノブも寄せつけず、ふたたび前を追いつ、懸命にホウヨウボーイに迫ったが、ハナ差届かなかった。終始インコースでじっとして、前が開いた瞬間に抜けだしてきたホウヨウボーイの器用なレースぶりが強く印象に残ったが、肝心なところで外に膨らんでしまったカツラノハイセイコの河内洋には悔いの残るレースになった。

あれから45年後の25年春、わたしは調教師を引退した河内洋にあの直線について訊いた。河内は「カツラノハイセイコは右回りが難しかった」と言った。

「右回りだと、外に行っちゃう。気が強くて、油断したらグワンともっていかれる。それで、有馬記念で負けたことがずっと頭に残っていた。関係者に申し訳ないな、と。だから天皇賞（81年春）に勝ったときは、嬉しいというより、ほっとしたよ」

（江面弘也）



東西のスターホースによる直線の攻防は、ホウヨウボーイに軍配が上がった。

「不死鳥が繰り出した 直線最後のひと突き」 ——ガラスの脚が掴んだ頂点

3世代が3番人気までを分け合った、混戦模様の大混戦。しかしこれを制したのは、4番人気のホウヨウボーイだった。度重なる故障から陣営の懸命な努力でターフに舞い戻ってきた関東の雄は、直線でインコースを突きカツラノハイセイコをハナ差退けて、念願の旧八大競走制覇を成し遂げた。翌年も天皇賞(秋)を勝利したホウヨウボーイは、2年連続で年度代表馬の栄誉に輝いた。

1980年12月21日

第25回 有馬記念

中山 芝右 2500m 3歳以上オープン 晴 良



レース結果

着	枠	馬番	馬名	性	馬 齢	騎 手	タイム	着 差	調教師	人 気
1	3	3	ホウヨウボーイ	牡	5	加藤和宏	2:33.7		二本柳俊夫	4
2	4	4	カツラノハイセイコ	牡	4	河内洋	2:33.7	ハナ	庄野穂積	3
3	2	2	カネミノブ	牡	6	加賀武見	2:33.8	1/2	阿部新生	2
4	1	1	メジロファントム	牡	5	横山富雄	2:34.2	2.1/2	大久保洋吉	1
5	7	9	リンドタイヨー	牡	3	中島啓之	2:34.4	1.1/2	見上恒芳	11
6	8	12	ユキフクオー	牡	5	小島太	2:34.4	アタマ	古山良司	10
7	5	6	ハワイアンイメージ	牡	3	増沢末夫	2:34.4	アタマ	鈴木勝太郎	8
8	5	5	サーベンプリンス	牡	3	谷原義明	2:34.4	ハナ	大久保末吉	6
9	6	7	アラナスゼット	牡	4	岡部幸雄	2:34.6	1.1/4	森安弘昭	12
10	8	11	サクラシゲキ	牡	3	東信二	2:36.3	大	境勝太郎	9
11	7	10	タケノハッピー	牝	3	伊藤正徳	2:36.4	1/2	尾形藤吉	5
12	6	8	ブリテキキャスト	牝	5	柴田政人	2:38.2	大	石栗龍雄	7

1988年 第33回
1990年 第35回

オグリキャップ

歴史的な馬に、最後の夢を託した日

競馬場のスタンドに座り、周囲の会話に聞き耳を立てる。盗み聞きとは悪趣味と思われるが、これは物書きの性。わかっちゃいるけどやめられない。ここ数年、明らかに競馬をはじめたばかりだとわかる会話が増えた気がする。これはめでたい。次の時代を担うファンがないと、競馬は生き残れない。そして、ライト層の対極には数十年単位で競馬と付き合うベテランたちがいる。当たり前だが、彼らもまたかつてライト層だった。だが、彼らが見ていた景色は現代とは違う。スタンドのあちこちで煙草の煙が立ち込める昭和末期から平成初期の灰色だった。そう、数十年にわたり競馬に魅了された人々のなかには1980年代終盤から90年代初頭の競馬ブームにのった人が多い。競馬場の灰色の景色とは一線を画すグレーのぬいぐるみを抱きしめ、一心不乱に声援を送る。競馬場でぬいぐるみを買って応援するという習慣は30年以上前から連綿と続く。もはや文化だ。

オグリキャップはそんな文化の元祖といっている。その登場は今日の競馬ブームにもつながっている。1頭をひたすら追いかけて、信じつづける、今という「推し活」スタイルの象徴のような存在だった。オグリキャップには人々の競馬観を変えるだけの物語と力があつた。

父 ダンスینگキャップ
母 ホワイトナルビー
母の父 シルバーシャーク

戦績 [22-6-1-3]
有馬記念(2回) マイルCS 安田記念
距離適性 マイル～中距離
脚質 自在・先行

引退レースの90年有馬記念はそのハイライトだった。

オグリキャップは有馬記念に三度出走している。最初は3歳暮れ。タマモクロスとの芦毛対決最終章で勝利し、瀬戸口勉調教師にGⅠ初制覇を届けた。翌年は9月から始動し、約2カ月で重賞2戦からGⅠ3回と進む強行軍。厳しい戦いに身を投じ、歯を食いしばるように走り抜く姿はまさに根性の塊だった。「私もオグリのように頑張らないと」。人々はオグリキャップに社会で挫けかけた自分を投影し、奮い立たせた。だが、連覇を目指した有馬記念はイナリワンの5着に敗れた。瀬戸口師はのちにレース当日、笠松時代に管理した驚見昌勇調教師を脚の様子が気になるからと呼んでいたことを明かす。さすがのオグリキャップも疲れていた。瀬戸口師は翌年の安田記念まで休ませることを決めた。

復帰戦の安田記念こそ若き天才・武豊騎手に導かれ、GⅠ3勝目を飾ったものの、宝塚記念2着後に瀬戸口師は右飛節に違和感を感じた。さらに秋の始動戦前に肩の出の悪さを感じ、調べたところ橈骨を痛めていたことがわかった。瀬戸口師はプール調教を取り入れ、獣医師と相談しながら治療と並行して仕上げていった。だが、天皇賞（秋）6着、ジャパンC11着とデビュー以来はじめて2戦続けて掲示板をはずした。瀬戸口師はこの頃について「急に仕上げて、天皇賞とジャパンCは体調がよくなかった。でも、いちいちしゃべるわけにいかないから僕は黙っていたけど」と振り返った。いつの時代もスターには人に語れない事情があ

る。それゆえにマスコミの間で誤解と憶測が飛び交う。

「有馬、オグリ出るの!？」（東京中日スポーツ 1990年11月28日）

「オグリだめか」（スポーツ報知 1990年12月14日）

三度目の有馬記念を前にして、まるで手のひらを返したかのような逆風が吹き荒れた。評論家や著名人も「オグリ限界説」を唱え、ファンの多くも同じような想いを抱いていた。これまでオグリキャップに夢中だった人々は試されていた——それでもオグリを信じるのか。

オグリキャップを復活させたい。陣営はそんな希望を安田記念で鮮やかに勝利に導いた武豊騎手に託すことにした。安田記念で見せた覇気がないことを感じた武豊騎手は、陣営に1週前と最終追い切りを実戦に近い芝コースで行うように伝えた。そこで試したいことがあった。オグリキャップは右手前が好きで、右回りで直線を向いて左手前に替えないことがあった。左手前に替えさせるには左ステッキを入れるという合図が必要だった。勝負の4コーナーで加速しながら最後の急坂を乗り越える。中山芝2500mは左右両手前を使いわけないと攻略できない。武豊騎手は左手前に替える動作を最終追い切りで確認した。

この日、中山競馬場に17万7779人が駆けつけた。東京競馬場の19万人とは比べものにならない密度であり、有馬記念の締切時刻数時間前から「今から窓口に並ばれても、メインレースの馬券を買うことはできません」と案内された。単勝4番人気5.5倍というオッズは

次世代による次世代のための

武器としての教養 星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていききたい。若い力で、世界を変えていききたいのです。

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？ それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための「武器」、としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていききたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長 柿内芳文